

人柄のかわり

松下昌義

みちしるべ

目次

一、朝の挨拶	P1
一、神の裁き	P3
一、楽しみと喜び	P7
一、人柄の香り	P11
一、大安心をいただく	P15
一、音を聞く	P19
一、男と女—その性について—	P23
一、光を受ける	P27
一、聖なる世界をいただく	P31
一、わたしの頂いた信仰	P33
一、一番美しい姿	P35
一、あとがき	P37

みちるベイト

互に安否を問いなさい — 聖書 —

朝の挨拶

「おはようございます」という朝の一言は、清々しい気分をよびおこします。

このような朝の挨拶はとても大切なことです。それを語る者も、聞く者も共にその心に新鮮な気持ちを持つことができます。

私たちにとって、朝は特別な時です。夜の眠りということが一種の死を意味しているとすれば、朝の目覚めは、新しい自分の誕生の時であるといえます。

新しい自分の誕生、出発の時である朝。そのときの「おはようございます」という挨拶は、あなたも新しい自分の誕生の産声であるといえます。

それは、昨日とは違った新しい自分を生きようとする、自分自身への呼びかけでもあるのです。そのような朝の挨拶をもって一日を出発していくことはとても大切なことであります。

言葉というものも、使い慣れてきますと、古くなり、その言葉がもともと持っていた意味も価値も無くなってしまうと、形骸化し形式的になってしまいます。その言葉のもつ手応えがまったく消えてしまいます。「おはようございます」という言葉もその一つです。

そのような理由から、「おはようございます」という挨拶の言葉が、今日の家庭の中から消えてしまったようにおもうのです。

夫婦の間で、親子の間で、「おはよう」という挨拶を交わしている家庭が、はたしてどれほどあるでしょうか。

しかし、朝の挨拶はとても大切なことであります。

先にも言いましたように、朝の挨拶は、人に対してするということだけではなく、新しい自分を呼び出す自分自身に対するよびかけなのであります。と同時に、「皆さん、ご一緒に、今日も元気で生かされていきましょ」という語りかけでもあるのです。つまり、朝という時に与えられる新しい命を分かち合う行為が、朝の挨拶であるといえます。

そのような朝の挨拶は、先ず、自分の家族の間

で交わされねばなりません。夫婦の間で、親子の間で交わされることは素晴らしいことです。その時、それぞれの気持ちは清められ、目に見えない神の祝福と共に一日が始まることでしょう。

X

X

挨拶という漢字の「挨」とは「ヒラク」とも読みます。また「拶」を「セマル」とも読むと漢字字典にあります。つまり「おし迫って開く」ことが挨拶の漢字の意味のようです。だとすれば、相手の心の深くに押し迫ってそれを開くという行為のことだと解釈できますが、それは興味深いことです。

ちなみに、聖書にも「挨拶」と訳されてある言葉があります。すが、その一つの言葉がよって持っている意味は、「強く抱擁する」と言うことのようにです。これも、漢字の意味に似て人の心の内へ愛を注ぎ、命を醸し出して来る行為のように理解することも出来そうです。

いずれにしても、挨拶を交わすことは、儀礼的なことではなく、人間の心の深い世界に愛を注ぎ、命を醸し出す、命への呼びかけの行いだといえます。その意味で、私たちにとって挨拶と言うものが一般的にどれほど大切な事なのかを確かと知ってほしいものです。

X

X

の、そりと起きてきて、ぼ、ぼ、そと食事すませ、黙って家を出て、職場や学校に行くようなことがあってはなりません。ましてや、朝起きるなり、文句の言い合いをして、荒ん

だ心で職場や学校に行くような夫婦や親子の姿であってはなりません。その日一日は暗いものとなるでしょう。

X

X

「うちの子どもは挨拶が出来ないので」と、困った顔をして言う親がいます。それは、日頃、親が家庭に於いて、夫婦や親子の間で、挨拶をしていないからです。

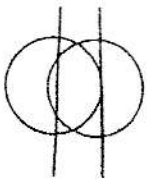
吾が子が他人に挨拶しないことは、親は、子供が儀礼を守れないこととして「恥ずかしい」と言います。しかし、よく考えてみますと、子供は挨拶をしないのではなく、親に教えられていないので「出来ない」のです。また、親は挨拶を儀礼的な行いと思つて、その儀礼行為をしないことを恥ずかしいことと考えていますが、挨拶は儀礼ではなく、それ以上の命への呼びかけであることに気づくことが大切です。

X

X

相手の心の深くに愛を注ぎ込み、相手も自分も共に生きる命を、ゆたかに燃え立たしめるような挨拶を、特に、朝に交わしたいものです。

さらに、目覚めさせて下さり、新しい命と、一日とを自分の前に備えて下さった神さまに、「おはようございます」と挨拶出来れば、その日は幸いな日となります。



みろするベライト

世も世にある欲も、過ぎ去って行きます。
しかし、神の御心を行う人は永遠に生きます。—聖書—

神の裁き

人間には、ただ一度死ぬことと、その後
に裁きを受けることが定まっている。

—ヘルブ人への手紙九章二七節—

死んでしまえば、すべては終わりだと思ひ込ん
でいる人がいます。

たしかに、人が死ぬと、その肉体は朽ち果て跡
形は残りません。

だから、病苦で苦しみ臥していた人が死ぬと、
「これで、この人も楽になった」と言います。

このような考え方は、言うならば、死はこの世
に生きた人についての、すべての事柄を帳消しに
してくれるものだという思ひ込みから出てきたもの
です。

このような思ひ込みは、きわめてこの世的な考
え方です。なぜなら、人間にとってこの世だけが
すべてであって、後はなにもないのだという人生
に対する考え方が、その根底にみられるからです。

死ねば、すべてが終わりだという考え方は間違

っていると聖書は教えています。人に必ず死があ
るように、死んだ後に裁きも必ずある、と聖書は
教えるのです。

ある金持ちがいた。彼は紫の衣を着て、毎
日贅沢に遊び暮らしていた。ところがラザ
ロという貧しい人が全身でき物でおおわれ
て、この金持ちの玄関の前にすわり、その
食卓から落ちるもので飢えを満たしたのも
のだと願っていた。そのうえ、犬が来て彼
のでき物をなめていた。この貧しい人が遂
に死に、天使に連れられてアブラハムのふ
ところへ送られた。金持ちも死んで葬られ
た。そして黄泉に行つて苦しみながら、目
をあげると、アブラハムとそのふところ
にいるラザロとが、はるかに見えた。そこで
声をあげて言った。「アブラハムさま、わ
たしをあわれんでください。ラザロをおつ
かわしになって、その指先を水でぬらし、
わたしの舌を冷やさせてください。わたし
はこの火炎の中で苦しみます」
アブラハムが言った、「子よ、思ひ出す
がよい、あなたは生前よいものを受け、ラ
ザロの方は悪いものを受けた。しかし、今

ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみ悶えてい
る。そればかりか、わたしとあなたがたとの間には
おおきな淵とちがおいてあって、こちらからあなたがた
の方へ渡ろうとおもっても出来ないし、そちらから
私たちの方へ越えて来ることもできない」。そこで
金持ちが言った、「ではお願いします。わたしの家
へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄
弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることがない
ように、彼らに警告をしていただきたいと思います」。
アブラハムは言った、「彼らには、モーセやナビー
の教えがある。それに耳を傾けるがよからう」。金
持ちが言った、「いいえ、アブラハムさまよ、もし
死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってく
れましたら、彼らは悔い改めるでしょう」。アブラ
ハムは言った。「もし、彼らがモーセとナビーとに
耳を傾けないなら、死人の中からよみがえって来た
者があっても、彼らはその勧めすすめを聞き入れはしない
であろう」

— ルカ福音書一六章一九節—三二節—
× ×

死んだ後、裁きがあり、地獄や天国に人は行くものである
という宗教の教えを、この世で、人々が正しく生きる為の方
便、つまり、便宜上の手段のように思っている人がいますが
その考え方は、とてもこの世的な考えであって、全く甘い考

えです。
死んだのち、私たちが裁かれるということは本当のことな
のであります。

この世は、肉体の機能を感覚として生きていますから、そ
の感覚で見ることが出来ないものは無いものだと思っ
てしま
います。また、耳に聞こえず、肌で感じる事ができず、さ
らに口で味わうことが出来ないものは総て存在しないもの
だと思
っています。たしかに、その意味では死後の世界も、裁
きも、天国も地獄も見ることがも触れることも出来ないもの
ですから、それらには無いと思うでしょう。しかし、それはど
こ
までも肉体的な感覚を基準にした判断であることを忘れては
なりません。

× ×

私たち人間は、肉体以上の者であります。それが証拠に、
肉体の感覚だけを満足させていれば、何時も幸福で平安であ
るとは
言えません。肉体以上の心の満足や平安を必要としま
すし、それを満たすことによって、私たちは本当の喜びと安
心とを自分のものとする事が出来る者です。

宗教は心の安心を満たすものです。心とは魂であります。
魂とはこの世を超えた霊の世界との関わりをする機能を持っ
ていま
す。ですから、宗教という英語のレイジジョンという
言葉によ
って出てきた意味が繋がるということであり、した
がって、神の世界と人の世界とを繋ぐことを言い表している
のも、なるほどと思
います。また、宗教の「宗」という文字

が「こころね」つまり、心根と読むといわれ、したがって、宗教とは、人間の心の根っこについての教えということになり、これもなるほどと思います。

とにかく、宗教は、人間の肉体世界の教えではなく、心の根っこの世界、魂と霊の世界とその関わり、また生き方についての教えなのであります。

その意味で、宗教は決して、この世の肉体的な生活だけを良く生きるためにある方便としての教えではありません。

この世にしがみついて生きている人間は、とても欲深く利己的でありますから、宗教でもその他のような偉大なことながらも、この世をできるだけ享樂的に生きようとする肉体人間の欲を満すために、利用できるものは何でも利用して取り込もうとする、すさまじさを持っています。

しかし、宗教は決して、この世の肉体人間の欲を満たす為に奉仕をするものではありません。

×

×

私たちの肉体が死んでも、私たちの魂は生きつづけて行くのです。しかし、その事実はこの世の肉体人間には見えません。ですから、人々は肉体が死ねば、すべてが終わりだと思ひ込んでしまうのです。

肉体が死んでしまった人の魂は、肉体人間として生きた地上での想念を引きずって、それに相応しい魂の遍歴をするのです。

お金を自分の頼りとしていた者は、いつまでもお金に頼る

うとする想念をもちつづけます。しかし、魂だけの自分にはお金は無意味となります。その結果、その魂は抛り所をうしななって、不安のうちにはさ迷うことになるのです。このことは権力に頼って生きた者、地位や名譽を頼って生きた者も皆同じように抛り所を完全に失ってさ迷いつづけるのです。また肉体的な享樂に自分の人生を費やした者も、肉体を失った魂のまま、享樂の飢餓状態の苦しみを背負ってさ迷い歩くことになりましょう。

×

×

とにかく、この世は物質という物や肉体に於いて表現され構成されている世界です。それは、悪でも善でもなく、一つの世界の現れなのであります。ただ、その物質を自分の魂の養いの為にとどのようか用いるかということによって、物質はその人にとって、善にも善にもなるのです。

物質によって構成され表現されているこの世は、さまざまな色、質、形、硬度、感触、味わい、香り、響きなどで充滿しています。それらが、そこに生きている私たちの感覚を通して、さまざまな想念を与えつづけるのです。その結果、そこから美と真実と聖さと善さとを自分の魂に摂取する者は、物質世界を生きた者に相応しい想念の持ち主となり、その魂は輝きわたり、肉体の死とともに次に必ず行く魂の世界で大安心の命を持って神のもとでいきつづけるものとなるのです。しかし、物質の世界であるこの世で、ただ、肉体の感覚の欲を肉体に於いて満たすだけに生きた者は、そのような想念を

自分に積んだのみであり、その者の魂は、それに相応しく肉
体の死とともにさ迷うことになるのです。

×

×

ここで、先のラザロと 金持ちの話を思い出してみまし
よう。金持ちは神に裁かれたのでしょうか。確かに彼は裁かれ、
自分の魂を苦しみの中に置き嘆き悲しんでいます。しかし、
よくよくみると、彼は物質世界に生きていた時に、自分の手
で自分自身を黄泉の苦しみに導くような生き方の想念を自分
の内に作り出してしまったということです。

神もキリストも人を裁こうとされるものではありません。

神がキリストを世に遣わされたのは、世を裁くため
ではなく、キリストによって世が救われるためであ
る。
—ヨハネ福音書三章一七節—

神は人の魂を妬むほどに愛して下さっていると聖書は示し
ています。人は裁きの対象ではなく、神の愛の対象なのです。
神に願いをかけられている者が私たちであります。救いとは
私たちの魂が神を仰ぎ神と共に大平安をもって、魂の世界に
生きることであります。しかし、神の願いに思いを向けるこ
となく、物質世界に自分を埋没してしまって生きる者は、あ
るが如く、自分の愚かで、自分自身を地獄に落とし入れて
しまうのです。

この状況をイエスさまは次のようにいわれました。

光りが世に来たのに、人々はその行いが悪いので、

光りよりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きにな
っている。
—ヨハネ福音書三章一九節—

わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対
しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、
終わりの日にその者を裁く。
—ヨハネ福音書二二章四八節—

人は自分自身の愚かで、自分の墓穴を掘るのです。人は自
分自身の愚かの重みで、深い底無し淵に自分を沈めてしま
うのです。

×

×

このような神の裁きは、すべての者のうえに平等に来ます。
権力者も金満家も狡猾人も暴力人も、さらに、この世の寺や
神社や教会が、どれほど賞賛し尊敬する者であっても、そ
うなこの世の評価には全く関係なく、その者の想念によっ
て公平に神はさばられます。

この世の自分自身の生き様に深い関心をもちたいと思いま
す。

からだを殺しても、魂をころすことの出来ない者ど
もを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす
力のあるかたを恐れなさい。—マタイ十章二八節—
まちがってはいけない。神は侮られるような方では
ない。人は自分のまいたものをかりとることになる。
即ち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り
霊にまく者は、霊から永遠の命を刈り取る。

—ガラテヤ六章七節—

みちるベイト

すべての人々に与えられた喜びを伝える。今日、ダビテの町にあなた方のための救主がお生れになった。 —聖書—

楽しみと喜び

「喜び」と「楽しみ」とは、同じではありません。しかし、私たちは日頃、そのようなことを考えることなくすごしています。

「そんな、めんどろなことを考えなくてもよいでしょう」と、言われるかもしれません。でも、私たちが生きて行くうえで、「喜び」とか「楽しみ」とかは、とても大切なことがらとしてあるものです。言うならば、私たちは喜びとか楽しみを懸命に求めて生きている者だと言えます。

このように、私たちの人生にとって大切な位置をしめている「喜び」と「楽しみ」について、少しでも考えることは、決して無意味なことではありません。むしろ、自分の人生をゆたかにするために、とても役立つのではないかと思えます。

若い頃は、楽しみも喜びも同じであって、喜びとは何か、楽しみとは何かなどと、考えるゆとりが無いほど熱情が身体に漲もたっているものです。

しかし、すこし年をとってきて、熱情だけで自

分を引っ張って行くことが出来なくなってしまうと、楽しみに対して苦しみが覚えてきます。喜びに對して悲しみも覚えて来るようになります。しかしそれでも、この世には楽しみもあれば苦しみもある、また、喜びもあれば悲しみもあるものだ、これが人生というものだ。ということですべて解決ということになります。

でも、もって年をとって来ますと、そんな理屈だけではどうすることも出来ない人生の現実、人間の悲しさ、苦しさに誰でもが直面するようになってまいります。

そのとき、人ははじめて、人生の喜びとは何なのか、楽しみとは何なのかと、理屈ではなく人生を生きて来た者の正直な思いとして実感するようになります。

それにしても、自分の人生に喜びや楽しみがなくなってしまうたら、もはや生きて行く力がどこからも出てきません。空しさと不安でおおわれてしまった人生ほど悲しいものはありません。

「そんなに家の中にばかり閉じ籠もってないで外へ遊びに出てみなさい。いっぺんに楽しくなりますよ。」などと、生活に喜びをなくしている人に？

対して一生懸命に語っている人をよく見かけます。

しかし、当の人は、誘われて外へ出て行っても、一向に喜ばしい態度を見せず、ますます空しくなってしまう、という場合があります。

おそらく、外に出て楽しく遊ぶことを勧めた人は、楽しく騒いで遊べば、喜びが同時に与えられるものだと思ひ込んでゐるのではないのでしょうか。

たしかに、友達関係が旨いき、わいわいと賑やかに遊ぶことができれば、それはとても楽しいことです。また、会社での自分の仕事や、自分の商売が自分の思うようにはこんでいくことは、とても楽しいことです。さらに、健康であり、自分の身体を自分の思うように動かし、働かせることができることは、とても楽しいことです。

でも、それらのことが、同時に自分に取って喜びであるのかと言うと、どうもそうではないようです。

わたしの若い時からの友達が、あるとき訪ねて来て、しみじみと語りました。

「最近、仲間とわいわい言って、遊び歩くことがしんどくなってきた。いや、空しくなってきた。」

彼は、小さいながらも、時流に乗る事業をしていて、私など比較にならないほどに経済的豊かさをもって生活しており、その身に着けているもの一つ一つが、総て何十万円もする物だという。乗っている自動車もなんとか言う外国の高級車

である。

私は幸か不幸か、そういうった類の物には余り関心がないのですが、例え関心があっても、私の経済力ではとうてい持つことはできない物だが、世間では、それは楽しいこと、喜ばしいことだと思ひ込んでゐるようです。

しかし、かの私の友達は空しいと言ひ出したのです。

空しさとはどんなことなのでしょう。それは、内容が空っぽのことです。外目では立派に見えても、その内容が空っぽならば、それはつまらぬものです。とすると、先のわたしの友人は、外目には派手でいい恰好だが、それに内容が全く無いことに気付きはじめたのだと思うのです。

一見して楽しそうに見えても、それに内容が無ければその楽しさは長続きいたしません。その逆に、一見楽しくないように見えていても、それが内容豊かなものならば、楽しみと喜びとが生まれてくるのです。

このように考えて来て分かることは、楽しみに喜びが加わるのは、その事柄に内容が在る場合なのだということであり、そして、その内容とは、その人それぞれにとって、そのことが、神の世界と人の世界とを繋ぐような意味がある、ということではないでしょうか。

意味とは、ものごとの内にある内容のことです。ですから

例えば、ものごとや言葉や文章に深い内容があるとき、それらのものごとや言葉や文章のことを、「意味深いことがら」とか、「意味深い文章」、または「意味深い言葉」などと言います。

ですから、「楽しみ」と「喜び」との関係について、次のようにいうことができます。即ち、私たちにとっての喜びはそのことに意味がある時に生まれてくるものであると。また喜びのない楽しみはその人にとって、本当の喜びにはならないと。

「楽しみ」と「喜び」とを単純に同じものだと思っているならば、ここで、静かに、その違いについて、ゆっくりと考えてみたいものです。

このことを確りと知り、弁えておくことは、今後、自分が生きて行く上で、とても大切な人生の智慧を自分の身につけたこととなります。

さまざまな快樂があります。たしかに、その一つ一つはどれも自分を楽しませてくれることでしょう。しかし、それがその場かぎりのことであり、それに内容がなく意味がなければ、その楽しみは、その人にとって決して喜びにはなりません。

だが、逆にさまざまな人生に於ける辛いこと、苦しいこと、決して楽しいと思えないことがらでも、それらのことからの内に豊かな内容があり、深い意味が秘められているならばそ

の辛さや苦しみが必ず、その人にとって喜びにかわることでしょう。

私たちの人生は、決して楽しいことばかりではありません。それどころか、かえって苦しいことだらけです。そして、その苦しみは、年をとるに従って多くなるものです。その意味で、人生は苦であります。ですから、楽しみだけを追い求めることを生き甲斐にしていた者は、必ず最後には失望するにいたるでしょう。

私たちが、それぞれに毎日生きて行けるのは、一体何に依っているのでしょうか。束の間の快樂が私たちを生かしているのでしょうか。そうではありません。では何でしょうか。それは、喜びであります。喜びがあるからこそ人はそれぞれに生きて行けるのです。生きることに喜びを見出せなくなったら者は生きては行けません。例え、肉体的に生きていても、その人は死んでいます。

生きることに喜びを見出すために私たちはどのようにすればよいのでしょうか。それは、自分の人生に意味を見出すことであります。

「見出す」と言うとき、大変な努力をしなくてはならないように思ってしまうが、「見出す」とはむしろ、「気づく」ことだと言えます。

どのような人の人生にも、内容豊かな意味が隠され秘めら

れてあるのです。にも関わらず、人はそれに気づくことなく生きています。

では、どの人の内にも隠され秘められている人生の意味とは何なのでしょうか。

それは、どのような人もすべて神に愛されている者である、ということ。×

親がその子供をいとおしく思い、熱心に育み、良く成長することを願うように、どの人も神に願いをかけられている者です。その神の願い心である愛を、すべての人が自分の内に戴いて持っているのです。

私たちが生きているのは、自分が生きようとするから生きているわけではありません。そうではなく、神さまの愛が私たちを生かそうと願われるから、私たちは生きることが出来るのです。×

人生は重荷を背負って坂道を行くがごとし、と先人が言いましたが、まことに、苦しさ^{くるしみ}と哀しさ^{あはれ}、不安と空しさ^{そら}がつきまとい、死んでしまいたいと思うことがあるのが、私たちの人生であります。

しかし、人はそれでも生きて行かなくてはなりません。ここにこそ、人生の苦しみといわれるものがあるのです。

誰も、この人生の現実からのがれることは出来ません。とするならば、それらの苦しみを、取り除こうとするのではな

く、積極的に受けとめ、それらを、むしろ恵みとしていただく生き方をするのが大切なのではないでしょうか。

では、どうすれば、そのような生き方ができる者となるのでしょうか。×

次のことに私たちが気づくことはとても大切なことです。一つには、不安や苦しみがあることが不幸なのではなく、不安や苦しみを乗り越えられないことが不幸なことであること。二つには、不安や苦しみを乗り越えさせるものは、自分の内にある喜びだけであることに気づくことです。自分の内に喜びを秘めている者は、どのような人生の不安も苦しみも感謝に変えてしまいます。

外なる人は日々滅ぶれども、内なる人は日々新たなり。と、使徒パウロは歎喜しました。

信仰を持つということは、自分の内に、神さまの愛と力が与えられ、現に自分が神の願い^{ねがひ}のところに依って生かされている喜びをいただくことであります。

友よ、「楽しさ」だけを求めるのではなく、神に愛され、生かされていることに気づき「喜び」を自分の内に持とう。かならずあなたの人生は変わるでしょう。



みちしるベライト

わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現わす。 —イエスの言葉—

ひとがら 人柄の香り

どのようなものにも、そのものの香りというものがあります。そして、その香りによってそのものが何であるのかということを知ることができません。

× ×
私たちが、自分の外なるものを知るための感覚器官として一つには目がありますが、これは見て知るためのものです。また耳があります。これは聞いて知るためのものです。口もありますがこれは舌を通してものを味わって知るためのものです。そして、皮膚はものに触れて知るといふ働きをします。さらに今一つ鼻がありますが、これは匂いを嗅いで知るといふ感覚器官です。

このように考えますと、私たちは、自分の外の世界を知るための感覚器官というものをたくさん備えているのだということに改めて気づきます。このような五つの感覚のことを五感と一般に言われていることは、誰でもがよく知っていることです。

この五感の働きは、ただ外部のものを知らるためだけの働きばかりではなく、外部のものを自分自身の内に取り入れて、自分を造る働きもしているのです。このことは至極当然のように思っていますが、案外その働きがどれほど自分にとって大切なことであるのかということ、私たちは気づいていないようです。

× ×
五感私たちにあって内と外とを結ぶ出口であり入口でもあります。自分の思いがそこから出る場所であり、外のもを自分の内に取り入れる入口でもあるのです。

ですから、五感があるがゆえに人は嫌なことや嬉しいことを見たり聞いたり、ときとして言ったり味わったり、触れたり触れられたりして、ときに悩み、ときに喜び、苦しみ、また有頂天になつたりいたします。

このようにして人は外部とのさまざまな関わりによって成長していきます。ですから私たちが、何を聞き、何を食べ、何を見、また何に触れ、何を嗅ぐかはとても大切なことであります。まことに、これらのどの一つをも大切な、自分を造る働きをする器官なのです。

そこで、今月は香りということを取り上げ、ご

一緒に少し考えてみたいとおもいます。

とは申しましたが、ここで所謂「香り」について語ろうというのではありません。私にはそのような専門的な知識などまったくありません。

先に、どのようなものも、そのものの香りというものがあり、その香りによって、それが何であるかを知ることができると申しました。

香りは、そのものの内を現す顔だといえます。人はその香りによって、そのものの内を知るのです。大抵の果物は自分の香りを放つことによって、自分の内が成熟したことを知らせます。また、香りによって、そのものが腐敗していることも知ります。香りはそのものの表情であり、そのものの言葉なのです。ですから、香りを「みる」といいますし、香りを「きく」ともいうのです。昆虫を含めたある動物達は香りによって、遠くにある自分にとって必要とする食料や獲物となるものや、また、仲間を知ります。香りは呼び声でもあるのです。これは、植物においても同じことが言えます。

それにしても、人にもそれぞれの香りがあります。飼犬は自分の飼い主の香りをよく知っていて、自分の主人が否かということのを的確に判別いたします。

しかし、わたしが今申しています人の香りというものは、そのような香りではなく、その人の、人柄の香りのことであ

ります。

人柄の香りというものは、その人の学歴とか社会的な地位とか財産の有無などには全く関係がありません。それらのもは言わば、その人の外面であって、その人の内面とは関係のないものです。香りというものは、そのものの内面の顔であり内面の表情であると先に申しましたが、この場合にもあてはまります。

内面の香りにもさまざまな香りがあります。強い悪臭を放っている人がいます。そのような人は、側にいるだけで逃げ出したいくなります。それは、傲慢の香りであり、不信の香りであり、攻撃的な香りであり、自己中心的で感謝することを知らない香りです。また、嫌悪の香りを漂わせている人もいます。望もなく、喜びもなく、悲観的にものごとを受け止めて、愚痴をこぼしてばかりいる香りです。

しかし、とても清潔な香りを持っている人もいます。そのような人の側においても何ら苦痛を感じません。さらに、とても力強さの香りを与えてくださる人がいます。そればかりか愛と喜びを与えてくれる香りを放っている人もいます。そして、もっとさらに、相手の人の心も肉体も清める働きをする香りを、無言の内に漂わせている人もいます。

香りは、とても浸透する力がつよいものです。ですから好ましい香りを放つもののそばに居る時、その人は好ましい香りを自分に受け、その人の内面に深く浸透していきます。こ

のことは悪い香りを放つものの側にいるときも同じことがおこります。それは、感化されるというような軽いことではありません。その香りがそのものの内面に浸透してしまおうといふべきです。

人の香りは、人の内面深くに浸透して行き、それを受けた人は、それに相応しく変えられてしまうのです。そればかりではありません。その人の香りは、その人が居る場所や物にも浸透していくのです。あえて申しますと、その人が身につけていたもの、生活している壁や柱にいたるまで滲みとおりその家の香りとなるのです。ですから、分かる人は、その家へ一歩足を踏み入れただけで、その家に主む者の人柄を知ることが出来るのです。

× 今日、世間では「香料」が多く出回り、自動車やトイレや風呂場やその他の生活の場、または、身につけるものから食品にいたるまで香りが立ち込めています。しかし、そのどの香りも安っぽく、人の表面感覚を刺激するだけのそれでありおよそ長時間耐えうるような香りではありません。強いて言えば、それは一種の悪臭だといえます。

本来、香りは聖なる世界への道標として有るものだとなわたりは考えています。それは、見える物が本来、見えないものへの道標であり、聞こえる音が永遠の世界への道標であるように、香りというものも肉体的なものではなく霊的な聖なる世界へ人を案内する道標なのだと思います。ですから、香と

いうものはさまざまな宗教的行事に取り入れられ、神への祈願や清めや荘厳さを深める役割をはたしてきたのですが、そこで用いられる香料は、ある限られた天然自然の香料であるようです。それは、今流行りの浅薄で画一化した表面感覚への刺激臭ではなかったとおもいます。

とにかく、香りというものが与えられ、それを受ける臭覚が私たちに備わっているということの深い意味から申しますと、香りというものは、悪臭を消すためのものではなく、また、単に、香りに人が一種の幻覚剂的に酔うためのものでもなく、一切の存在の根源である聖なる世界への道標としてあることを自覚すべきではないかとおもいます。

その意味では、宗教がその行事で香料を用いるときも、そのところを自覚しないでいる時、宗教的な墮落が生じるのではないでしようか。そのことを知っていた旧約聖書における預言者は、宗教儀式に香を薫くことを鋭く批判しました。

× どの人にも、その人の人柄としての香りがあるということをも、もう一度思い出してみましよう。

そして、はたして、わたしの人柄の香りはどのような香りなのかということも、胸に手を当てて考えてみましょう。

しかし、他人の香りは分かっても、自分の香りは分からないうものです。それは、他人の顔は思い描けても、自分自身の顔はなかなか自分の内に思い描くことが出来ないのと同じです。

ですから、自分自身の香りについて詮索しない方がよいとおもいます。それよりも、大切なことは、よい香りの持ち主に学び、交わることのほうが大切です。

香りはうつるものであり、その浸透力はとても強いのです。自分の人柄の香りをよいものにするためには、よい人柄の香りの持ち主に学び、交わることであります。

朱に交われば赤くなる、と言われますが、まさに、よい香りに交われば、よい香りとなるのです。自分が交わったものの香りが、自分自身の香りとなるのです。

私は今、どのような人柄の香りをもったものと交わっているか、ということを考えてみましょう。

「あなたの宝のあるところに、あなたの心もある」

— マタイ福音書六・二一 —

とイエスさまは言われましたが、私たちが、今自分にとって一番に関心があり、最も大切だと思っているものやことの持っているその香りが、自分自身の香りとなるのです。

香りは内面から滲み出てくると先に言いましたか、その人の心の香りがその人の人柄の香りとなって必ず出てくるのです。どれほどに、香水を自分の上辺にふりかけ、自分を繕っても内面から滲み出てくる香りを消すことは出来ないばかりか、低俗な香水をふりかけるとき、その人柄の香りは、ますます嫌悪すべき香りに倍加するでしょう。

使徒パウロは申しました。

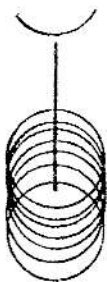
「神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連ならせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知る智慧の香りを漂わせてくださいます」

— コリント第二の手紙二・一四 —

使徒パウロの偉大な人柄の香りは、キリストとの交わりによるのです。そして、彼は行く先々において、その香りを漂わせ、それを受けた者はすべて彼と同じ香りを自分の内に深く浸透させられて、彼と同じ人柄のかおりの持ち主となりました。

香りは手でふれることも、目でみることもできません。特に、人柄の香りはなおさらです。また、決して派手な出来事を伴いません。しかし、なによりも、深く、広く、鋭く静かに浸透して行き、そのものを根本から変えてしまうものであることをよく知っておくことが大切です。

このように考えてきて、今あらためて、今日の社会における臭覚文化の在り方も含め、人柄の香りというものを、自分の生き方として反省してみたいと思います。



みちしるべ

わたしの平安をあなた方に与えます。

—キリストの言葉—

大安心をいただきたいこう

失望、落胆、感い、焦り、それにさまざま不安、さらに、いろいろなことに対する恐れをいだいて生きているのが、私たちの生活です。

× × ×
 自分のこと、夫や妻のこと、また子供のことで
 思いの通り、計画の通り、願いの通りに旨いかな
 なかったことで失望したり、落胆したりいたしま
 す。また、結婚のこと、恋人のこと、受験のこと
 仕事のこと、会社や近所や嫁、姑また親戚、友人
 などとの人間関係のことで、どのように対応した
 らよいか悩み戸惑うことがあります。さらにお
 金や病気のことで不安をいだくこともあります。
 × × ×
 そして、馬鹿にされるのではないかと。仲間外れに
 されるのではないかと。恥ずかしめられるのではな
 いか。生活や自分の見られたくないことを知られ
 ているのではないかと、といった恐れも密かにもっ
 ています。

× × ×
 私たちはいつも被害者の立場に立って、悲しみ
 恨み、怒り、卑屈な思いに生きているだけではあ

りません。ときとして、加害者の立場に立ち、蔑
 み、嘲笑し、威張り、優越感を楽しんでいるとき
 もあります。

× × ×
 時に正義を掲げ、正論を語り、謙虚になり反省
 をしますが、また、鬼のように冷血感になり、非
 道な言動をなし狂気に荒れることもあります。

× × ×
 多弁になるかと思うと沈黙を守り、上品である
 かとおもうと下品に居直り、夜叉に変じてわめき
 ちらします。正に、私たちは千変万化、泣き笑い
 の姿こそ、わが生活であります。

× × ×
 このような自分自身をよくよく省ると、実は、
 自分の存在の一番深い土台の処が空っぽなのに気
 づきます。何も無いのです。だから何時も不安と
 恐れと感いと、正体不明の焦りが自分の生活に、
 ただよって来るのです。

× × ×
 ですから、私たちは、その空っぽの部分埋め
 ようと、いつも無意識に願いつけて生きているの
 です。この空っぽの部分が、自分の土台にあるか
 ぎり根本的な不安や恐れや感い焦りはどうしても
 拭い切れません。

× × ×
 実際に私たちはさまざまなことをして、その空
 虚な部分を埋めようと努力しています。しかし、
 いつもその努力は一時的な誤魔化しにおわってし

まうのです。

仕事に熱中する。高価な物を身につけ持ちたがる。グルメ食品に群がる。外国にやたら行きたがる。わけも分からずに教育熱心になる。性におぼれ、酒にふける。自分以上の自分になろうとしてオカルト宗教に集まる。騒いで歓楽にふける。他人の品定めと噂ばなしに時間をついやす。また、趣味や教養を身につけようとす。しかし、問題に遭遇する(ちうぶつ)とき、自分が持っている根本的な不安や恐れや感いに対してそれらが何の解決にもならないことを知るのです。

かくして、不安は消えず、恐れは無くならず感いはつるばかりとなり、ますます、より強い刺激を求めて、欲望は異常の世界へ人々を迷い込ませることになります。

× ×

何が原因で、あなたがたのあいだに戦いや争いが起るのですか。あなたがた自身の内部で争いあう欲望がその原因ではありませんか。あなたがたは、欲しても得られず、人を殺します。また、熱望しても手に入れることが出来ず、争ったり戦ったりします。得られないのは願ひ求めないからで、願ひ求めても、与えられないのは自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願ひ求めるからです。神に背いた者たち、世の友となることが神の敵となることだとは知らないのか。世の友となりたいた願う人はだれでも、神の敵になるのです。それとも聖書に次のように書かれているのは意味がないと思うので

すか。「神はわたしの内に住まわせた霊を、ねたむほどに深く愛しておられ、もっと豊かな恵みをくださる」それで、こう書かれています。

「神は、高慢な者を敵とし、

謙遜な者には恵みをお与えになる。」

だから、神に服従し、悪魔に抵抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げて行きます。神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます。罪人たちは、手を清めなさい。心の定まらない者たち、心を清めなさい。悲しみ、嘆き、泣きなさい。笑いを悲しみに変え、喜びを愛いに変えなさい。主の前にへりくだりなさい。そうすれば、主があなたを高めてくださいます。

—新約聖書ヤコブの手紙四章一節—十節—

× ×

私たちは、恐れも不安も感いもない平安な生活、喜びと希望に満ちた人生を送りたいと願っています。

私たちがそのように生きたいと願うなら「求めなさい」とイエスさまは言われます。

求めなさい。そうすれば、与えられる。…だれでも、求める者はあたえられる。…あなたがたのだからがパソを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。ましてや、あ

あなたがたの天の父は求める者に良い物をくださるにちがいない。

— 新約聖書マタイ福音書七章七節以下 —

この世の誰よりも、私たちが平安と喜びと希望に生きることを願っておられるのは神です。神は私たちに願いをかけていられる方、神に願いをかけられている者が私たちです。この事実をキリストさまはハッキリと示してくださいました。だからこそ、「求めなさい。そうすれば、与えられる」と言われるのです。

しかし、自分がこのような者であることに全く気づきませぬ。ですから、自分のこと的一切を自分自身で満たそうとするのです。その為に、いろいろと策をたて、智慧をしぼり、努力します。学歴をつけ、よい地位につき、お金をため、健康に気をくばり、楽しく生活をする事によって、自分を満たそうとします。でも、決して満たし切れることは出来ないでしょう。なぜならば、わたしたちが、自分の一番土台の処に持っている空っぽの部分、この世にあるどのようなものをもってしても、決して埋めることは出来ないからです。少なくとも、それは一つの必要条件であっても、絶対条件ではないのです。

キリストさまは言われます。

わたしは平安をあなた方に残して行く。わたしの平安

をあなた方に与えます。わたしが与えるのは、この世が与えるようなものではありません。あなたがたは心を騒がせるな。またおじけるな。

— 新約聖書ヨハネ福音書十四章二七節 —

私たちの最も深い内なるところの空虚を埋めて下さるお方は、神をおいて他にありません。誰もが内に持っている不安に平安を、恐れに希望を、感に確信を与えてくださるのは神さまでけです。

キリストさまは、「わたしの平安を与える」と言われました。それは、神の絶対の守りと支えとの平安であります。どんな苦しみや悲しみにいる時にも共にいてくださる神の愛、どのような非難と攻撃にさらされている時にも守って下さる神の愛、さまざまな絶望と肉体の死に直面しているその時にも、しっかりと私たちを擁^擁まえて離すことなく導き下さる神の愛、この愛こそキリストさまがお与下さる「神の平安」なのであります。キリストさまは、この神の平安そのものを生きられたのです。多くの世の人々の無理解、中傷、非難、攻撃にも関わらず、その人々を愛し続け、十字架刑の苦しみの直中^{直中}にある時にも、なお敵のために祈り、遂に、死を乗り越えて永遠の栄光の命に復活なされる出来事によって、キリストさまは、神の平安の何であるかということをお示しになつたのです。

「わたしの平安をあなた方に与える」とおっしゃる、キリストさまの「わたしの平安」とは、何と偉大な平安であることでしょうか。この平安に生きる者には、最早、どのような敵もありません。使徒パウロは神の平安に生きる喜びを次のように歓喜して絶叫しました。

これらのことについて、なんと言おうか。もし、神が私たちの味方であるなら、だれがわたしに敵しえようか……だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか……だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。だれがキリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。艱難か苦難か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か、……しかし、わたしたちを愛して下さった方によって、わたしたちは、これらすべての事において勝ちえて余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も世の支配者も現在のものも将来のものも、その他どのようなこの世のものも、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを絶対に引き離すことはできないのである。

—新約聖書　ローマ人への手紙八章三一節以下—

パウロさんは、この大安心で自分の内の最も深い処の、あ

の空虚を埋め尽くしたのです。

キリストさまが「求めなさい、そうすれば与えられる」とおっしゃることは、この平安です。

しかし、私たちは、そのような大安心を神に求めないで、ただ、自分の目の前の楽しみを満たすようなことを、神に求めるばかりです。それを信仰と称し、宗教もそのような楽しみを与えることで、世の人々の関心を買おうとしているようです。そこでは、人は決して救われることはないでしょう。先に紹介しましたヤコブの手紙を、今一度、読んでみましょう。その終わりの部分で、ヤコブは不思議なことを語っています。

「悲しみ、嘆き、泣きなさい。笑いを悲しみに変え、喜びを憂いにかえなさい……」

これは、この世のものをどれほど自分に取り入れても、決して、救われることは無いのに、それに気づくことなく、血眼になってこの世のものを得るためにだけ、かけがえのない人生を費やしている、己の姿の愚かしさを悲しめ、嘆け、泣きなさい、と警告しているのです。

朽ち行くこの世の富みや権力、楽しみだけで笑い喜んでいる己の愚かさを嘆き悲しめ、と諫めているのであります。

愛する友よ、自分の土台に大安心をいただこう。そのときあなたの人生は変わるでしょう。



みちしるべ

その音楽は全地にあまねく 一聖書一

音を聞く

もろもろの天は神の栄光をあらわし、
大空はその御手のわざをしめす。

この日は言葉をかの日につたえ、

この夜は知識をかの夜につげる。

語らず言わず、その声は聞こえないのに、

その響きは全地にあまねく、

その言葉は地のはてにまでおよぶ。

—旧約聖書 詩篇十九篇—

わたしはこの詩篇の一節がとて好きです。ただ好きというだけではなく、神の栄光そのものをそこに聞くのです。そして、その栄光の響きとなって宇宙に導かれ駆け巡るのを覚えるのです。

× ×

宇宙には音が満ち満ちています。否、すべてが音なのだといえます。光りも音、風も音、樹も音、水も音、花も音、雨も音、雪も音、山も音、雲も音、海も音、星も音、私たちも音なのです。そして、この宇宙そのものが音なのです。

ですから、わたしたちが自ら音となると、自

我がという殻を抜け出して、宇宙を駆け巡ることができるのです。

× ×

音はこの世とあの世とを結びます。私たちが本当に音を聞く時、その人は音に帰るのです。

歌や音楽を聞くとき、聞く人は自我の小さな殻から解き放されて、この世のすべてのしがらみから自由になります。そして、聞く人を深い感動に導き、あるいは聖化し、あるいは魔と化し、より深い平安と静寂を与える一方、激しい激情の海へ投げ込み狂気に変貌せしめます。

カントリオスというラテン語は、歌という意味と共に呪文とか魔法とかを意味するときがありますが、音がもつ働きを的確に語っていると思います。このような音の持つ呪術性を警戒して、イラソにおいて革命後音楽を排斥しているとのこと

です。しかし、イスラム教徒が高いミナレットの上から、礼拝の時を知らせるために唱えられる例のアザーンの独特な声の響きは、イスラム教徒の礼拝の行為を深めるために大きな役割を果たしているように思います。

× ×

古今東西の宗教はなんらかのかたちで音と共にその儀式をおこなっています。旧約聖書や新約聖書においてもさまざまに楽器や歌などが登場し、その宗教儀式、つまり神を讃美したり神との交わりのための道具的な役割をはたしています。ここに興味深い旧約聖書にある出来事のいくつかを紹介しておきましょう。

エリコは、イスラエルの人々の攻撃に備えて堅く閉ざしたので、誰も出入りすることが出来なかつた。そのとき、神はヨシアに言われた。

「見よ、わたしはエリコとその兵士と勇士たちをあなたの手に渡す。あなたたち兵士は皆、町の周りを回ちなさい。町を一周し、それを六日間つづけなさい。七人の祭司は、それぞれ雄羊の角笛ツリフエを携えて、神の箱を先導しなさい。七日目には、町を七周し、祭司たち角笛を吹き鳴らしなさい。彼らは雄羊の角笛を長く吹き鳴らし、その音があなたたちの耳に達したなら、民は皆、関関の声を上げなさい。町の城壁は崩れ落ちるから、民は、それぞれ、その場所から突入しなさい」………角笛が鳴り渡ると、民は関の声をあげた。角笛の音を聞いて一斉に関の声をあげると、城壁はくずれ落ちた。

—旧約聖書ヨシア記六章—

樂を奏する者が演奏すると、神の御手がエリシヤに臨臨み、彼は言った。「神はこう言われる………」

—旧約聖書列王記下三章—

「悪霊がソウル王を襲うとき、おそばで彼の奏でる豎琴が王様の御気分をよくするでしょう」サウルは家臣に命じて「わたしの為に、豎琴の名手を見つけてだして連れてきなさい」………悪霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍かたわらで豎琴を奏でると、サウルは心が安まって気分がよくなり、悪霊は彼を離れた。

—旧約聖書サムエル記上十六章—

もう十年以前のある夏のことですが、福井県にある曹洞宗の絵本山永平寺に行つたとき、法堂で行われる朝の法要に出会いました。わたしは法堂の脇で見守つていたのですが、やがて、三十人ほどの僧達によって般若心経はんにゃしんきょうが称え始められたのです。その読経の声は、朝霧あさぎりが立ちこめる周囲の山々の雲囲気を一層清くし、特に永平寺独特の心経を称えるそのリズムが全山を包み、日常性を超えた世界に運んでくれるような感を覚えていたそのとき、何と表現したらよいのでしょうか。「ぼん・ぼん・ぼん」という音が、読経にあわせて鳴りだしたのです。その響きは、あたかも宇宙の遠い果てから鳴り響いてくるような響きに聞こえました。そして、その響きに聞き入るとき自分自身がその響きと化し、宇宙大に拡大され、

吾が宇宙と成り、宇宙が吾となるのを覚えたのです。それは
まったき解放と安らぎそのものでした。

やがて、朝の法要は終わり、僧たちは去っていききました。

わたしは、早速、さきの響きを生み出したものが何だったの
かと法堂の中へ入りました。それは直径が一米もある大きな
木魚だったので。 (わたしにはそれが正式になんと呼ばれ
ているのかわかりません)

わたしは、その次の年の夏、再びその響きを求めて永平寺
を訪ねましたが、同じ法要において、大木魚の音は聞こえて
も、あのとときの響きを聞くことは出来ませんでした。その後
今日に至るまで、かの地には行っていませんし、再び訪ねよ
うとも思っています。なぜなら、あの時に受けた、あの響
きはわたしの胸に今も響き、わたしを宇宙に響かせてくれて
いるからです。

×

×

宇宙は音で満ちていると先に言いました。また、宇宙は音
であるとも言いました。ではその音とは何なのでしょう。か。
それは、神の栄光そのものを示し語り伝え証する業そのもの
です。それは他でもなく、宇宙の万物は絶対にこの世のいか
なるものにも依存することなく、神に依つてのみ生まれ、保
たれ、完成して行くという神の偉大さそのものが、神の栄光
なのであります。神のこの偉大さは、絶えることなく「しめ
され」「つたえられて」さらに「その響きは全地にあまねき」
「その証の言葉は地の果てにまでおよんでいる」のだと、語

っているのが、冒頭に掲げた詩篇であります。

まことに「しめす」とか「つげる」とか「つたえる」とか
いう表現はとても印象的です。特に、「つたえ」という言葉
の意味が「泉が水をこんこんと湧き出すごとくに、豊かに与
えることであり、途絶えることなく続くことの意味がある」
のだと知るとき、より一層に、この詩篇の語りがしめすとこ
ろの深さに気づきます。

それゆえに、神の栄光が大滝とすればその響きこそ音なの
だといえます。しかし、その響きは無音の音として地の果て
にまでおよんでいるというのです。

×

×

神の栄光そのものである音が宇宙に満ちています。しかし
誰でもそれを聞くことはできません。なぜならば、それは、
無音の音として響いているからです。音が無いことは無音で
あります。しかし無音の音とは、音が天地一杯に漲っている
が聞くことが出来ない音ということでもあります。

神の栄光は天地一杯に漲っているのです。しかし、それが
すべての人に知られることはありません。しかし、すべての
人に隠されてあるものではありません。

聞く耳を持つ者のみにその音は聞こえ、見る目を持つ者に
だけそれは見えるのです。

ですから、イエスキリストはたびたび、「目があっても見えな
いのか。耳があっても聞こえないのか」と言われました。

×

×

それにしても、音を聞くとはどういうことなのでしょう。この場合に二つの聞き方があります。一つはこちらより音を聞くということ。この聞き方は、自分の思い、自分の感情、自分の智慧で聞くということです。いま一つの聞き方は向こうの音を聞くということです。つまり、音を自分に受けることです。自分の感情や思いや智慧で聞くのではなく、音そのものをそのまま受けて聞くということ、つまり、「聞こえて来る」のをそのまま聞くということになります。このことを、さらに別な言い方であらわしますと、「こころを静かにして聞く」ということです。また「静寂に於いて聞く」ということになります。

このような二つの聞き方がありますが、本来に音を聞くことが出来るのは、二つの聞き方であることは申すまでもありません。

×
自分の思いや感情や智慧で音を聞くとき、所謂音は聞くことができて、決して無音の音は聞こえてはきません。

×
このように言いますと、音と無音の音とは別々にあると思つてしまいますが、それは別々にあるのではなく、即一つとしてあるのです。音が即ち無音の音であり、無音の音が即ち音なのであります。

先に、永平寺での私のささやかな一つの体験をお話いたしました。最初が私が聞いたのは、大木魚の音に即ち無音の音を聞いたのだといえます。しかし、二度目に訪ねた時には只

の大木魚の音だけが聞こえて、無音の音の響きを受けることができなかったのでしょう。

何故聞こえなかったのかということについてはさまざまなきがいろいろありますが、ここではそれを取り上げる余裕がありません。

×
宇宙には無音の音が満ちています。「言わず語らず聞こえないのに、その響きは全地にあまねき、地のはてにまでおよぶ」と聖書の詩篇の信仰人は告白しました。

×
私たちが音を聞くとき、その音に於いて無音の音を聞かざらば、私たちは神さまの栄光を耳を通し全身で聞いたことになるでしょう。そのとき、その一音はその人を造り変えることとなりましょう。

今日、さまざま音がみちあふれ、騒音公害となつて私たちの生活を圧迫しています。只の音と、只の音としか音を聞くことが出来ない人達が満ちるとき、最早そこには音の存在理由はなくなるのです。まさに騒音となり公害となつて人を、自然を破壊する凶器となるだけであります。

また、快い音を自分の思いや感情や智慧で聞くことを楽しむ人々が、どれほど増えても、そこで神の栄光である無音の音を聞くことがなければ、これもまた真に音を聞いたことにならず、音の存在理由がなくなると言えないでしょうか。



みちるベイト

男は父母を離れて女と結ばれ二人は
一体となる。 — 聖書 —

男と女

— その性について —

私たちは、男としてあるか、女としてあるか、そのどちらかです。そんなこと当たり前ではないか、と声がかかりそうですが、しかし、それはとても不思議なことです。

私たちのだれひとりとして、自分が男性や女性であることを、自分で選んで生まれて来た者はいません。気がついたら女性であったり、男性であったので、それは受け入れなければならなかったのです。そのような存在が男としてのわたしであり、また、女としてのわたしなのです。それはとても私たちにとって不思議なことではありません。

もう一つ不思議なことは、そのような男性と女性との相互の関わりがなければ、私たちは在り得ないのだということです。

× ×
私たちは、初めから自分が男性であるとか女性であるとかを自覚しているわけではありません。思春期にいたって、人は自分が女性であること、自分が男性であることに強く目覚めます。このように自分が男であり、女であるということを自覚す

るということは、それはとりもなおさず、自分自身に目覚めることでもあるのです。

また、自分が男性であること、女性であることに目覚めることは、自分とは異なる異性の存在に目覚めることでもあります。それはとりもなおさず、自己に対する他己の存在に目覚めることになるのです。

そして、先にも申しましたように、女性と男性との相互の関わりがなければ私たちが生きて行けない者であるということに目覚めることは、生きることの喜びや悲しみを感じ始めることでもあります。これこそ、人間としての自覚をもつことであり、人生というものを自覚することです。

このように、私たちが自分の性に目覚めるといふことは、人生に目覚めることであり、深く人間の問題に目覚めることでもあるのです。

× ×
私たちは、自分が男性であること、女性であること、そして、その関わりに目覚めること、即ち性に目覚めることは、ただ他の動物と同じように種の生命を保つための本能的な働きや衝動のよう受け止めがちですが、決してそうではありません。それは深く人間存在がもつ問題に目覚めることなのであります。ですから、男と女の問題は人

間にとって大切な永遠の今日的課題であるといえます。

昔から、男と女についての考え方、^{みかた}観方がいくつもありましたが、そのひとつは、男と女をただの生物学的な^{おすめす}雄雌と考える立場です。二つめには、本来人間は「おとおんな」の両性を備えたものであったが、神により男と女とに分離され半身人間となったとみるギリシャ的・プラトンの考えかたです。そして、三つめには、男女の性別は本来のものではなく、女性という性は第二の性として男性側から押しつけられた社会的^{へんげん}偏見であり、「人は女に生まれるのではなく、女になるのだ」というポーポワールの考え方です。さらに、四つめには、男と女とは生物学的な雄雌の関係である同時に、それを超えて、互いに向かい合い、協力し、人格的に深く交わる関係をもちつつ生きて行くものとして神さまにより定められているという聖書の考え方です。

以上いくつか^か掲げましたが、特に今日では只に机上の論議としてではなく、現実的、社会的な問題として行動しつつ女性の側から問題を提起されていることは、既に私たちのよく知るところです。

そしてこの問題は、当然のこととして「性」そのものの問題として論議されることとなります。なぜならば、先にも少し述べましたが、男と女の問題は必然的に生きるという問題であり、その生に性は最も深く関わっているからです。

男と女との関わりにおける性の問題は、私たちににとって最も大切なこととして、^{まじめ}真面目に考えてみなければならぬことです。

人は性の関係をめぐって喜び、悲しみ、愛し、憎み、希望し、苦悩します。ある人は性関係の恍惚境に天国を夢見、ある人は性の桎梏（手かせと足かせ、自由を束縛するもの）の中に地獄を規定します。性はただの生物学的衝動の一つとしてそのまま肯定するだけでは済みますことはできません。性は深く人間性そのものと直結しており、その人の人間観や人生観と関わっているのです。

世の中には、立派なこと、賢^{かしこ}そうなことを語っていても、ことに性に関しては、雄雌^{おすめす}的な感覚しかもたず、極めて卑猥^{ひわい}な見方しかできない方がいます。そのような人を観ていますと、それに^{ふさわ}相応しい人生に対する考え方や生き方を表面的にはどうであれ、本音の部分に持っているのを知ることが出来ます。

私たちは性を、神さまの創造^{そうちう}に於ける人間の自然なる定めのもとで、感謝して受け取り、自らその定めのもとで自然でありたいとおもいます。即ち、性をことさらに罪悪視したり反面ことさらに性を讚美したりする必要はありません。

人間が互いに関わりつつ共に生きる者として神さまに創造されているということが、最も具体的な姿が男と女との関わりによって知ることが出来ます。そして、その在り方が性に

於いて示されているのです。

男と女との性の交わりが示すことは、二つのものが一つになる喜びであります。互いに自分を相手に与えることによつて得る喜びであります。即ち、人格相互の献身によつて得る共なる喜びであります。このことは「わたし」は「あなた」という人格存在との邂逅によつてはじめて本当の「わたし」になるという、人間存在の本当の在り方の具体化なのであります。

これを、もうすこし堅く表現しますと、男女に於ける性は人間存在の奥義の具体化であり象徴的な意義を持つていといえます。

しかし、一方に於いて性ほど利己的なものに転落してしまふ危険性を孕んでいるものは他にありません。

かつて、有島武郎が「愛はおしみなく奪うものである」と言いましたが、事実、性は互いに相手から自分の快楽のみを奪い取るうとする危険性を孕んでいるものであり、自分のみがあるのだと言う思いに落としいれてしまいます。

このように男女の性の関係が歪められてしまいますと、もはや、そこには人格関係が失われてしまい、相手を「それ」という物のように見てしまうようになります。その結果、性は商品とみなされて、お金で売り買えされるようになってしまふのです。しかし、そうすることによつて、それを買う者も、自らを「わたし」という人格でなく「これ」という物に

落とし入れてしまうことになり、そこに於ける人と人との関係は「これ」と「それ」との関わりにしか過ぎなくなつてしまい、完全なる人間喪失を来すことになるのです。

このように人間に於ける性は、非常に壊れやすく、歪められ得る危険性をもっています。それだけに性は大切に注意深く取り扱わねばならぬものですが、だからといってすぐさま性のこのような一面のみを強調して、ことさらに「性は汚らわしきもの」とみたり、「性のない人間を最も聖い人間の在り方」とする極端な禁欲主義は観念的、かつ幻想的で人間性の抑圧であるといえます。むしろ、わたしたちはこのような人間の性の壊れやすく、歪められやすい姿に、人間としての悲しい現実を自ら確かめる場としたいと思います。

そして、それゆえにこそ、性における男女の人格的な関わりの本来的な在り方、つまり相互に与え、かつ、受ける喜びによる一体感を、大切に愛という内実によつて育てて行かねばならないと思うのです。

今日、男と女との性の関わりがとても混乱しているようです。それは、人間の在り方が混乱していることによるのであります。なぜならば、性の在り方は、先にも述べましたとおり人間の生き方、在り方と深く結びついているからです。

とりわけ、性が快楽追求のみの道具とされ、その場が利己的な貪りに化すとき、そこは地獄となるのです。そこから、

いったいどのような良きものが生まれてくるでしょうか。そこから、どれほどの愛が生まれて来るでしょうか。

その関わりが、利己的な快楽を満足させてくれなくなったり、切れてしまうような関わりが性だとしてしまうならば人間は永遠に救われることはなくなるでしょう。

どれほど正義を語り、愛を叫ぼうとも、性における関わりが根本的に歪められている限り、人間に本当の平安は来ることがないでしょう。

性にたいする関わり方は他者にたいする関わり方であり、性にたいする態度は人生にたいする態度でもあるのです。

このことを知るとき、今日の若き男女に本当の性の在り方を感化できるような家庭や社会が緊急に求められます。

x

x

一方、夫婦における性の在り方も、真剣に人間の在り方として共に反省的に考えなければなりません。その場が一方的な快樂追求の場であったり、さまざまな雑誌に紹介されてある性情報に振り回される場であったりするならば、そこからいったいどのような人間や、生き方にたいする態度が生まれて来るでしょうか。

神さまは、私たちにも性を備え与えて下さいました。それは、私たちの生き方がその根本において、交わりの生き方であり、さらに、その交わりは、相手に与え合う関わりによってこそ完成するということの具体化としてであります。

人、その友のために己が命を捨てること、これほど大いなる愛はなし。

と聖書にありますが、その愛の交わりの極致の具体的な生きさまをキリストさまは身をもって私たちに示して下さいました。私たちはまことに利己的です。しかし、神さまを見上げ、キリストさまを通して与えたもうた赦しのもとで、人生を生きようとするならば、自ずと性の在り方も正され、喜びと感謝の賜物として行使できるようになるでしょうし、さらに、家庭も社会も国家も安定したものとなり、神に栄光をあらわすところとなるでしょう。

みちしるべライト

すべての人を輝らすまことの光があって世に來た。 —聖書—

光りを受ける

わたしたちの生活にとって光りはとても大切なものであります。光りなくして私たちは生きてはいけません。

光りの中の光りともいふべきものは太陽です。この世のなかで、最も明るく大きい光りは太陽の光りです。太陽の光りの前では、どの光りも光りでなくなってしまう。にも関わらず、わたしたちは太陽の光りを自覚的に受け止めてはいないようです。

それは、空気がそうであるように、太陽の光りが、私達の求める前に、無尽蔵むじんぞうに与えられつつけているから、それが在るといふことすら自覚しななくてすむほどに、当たり前のこととなってしまうているのです。

× 私は毎朝太陽に自覚的に向かいます。確たしかりと朝の太陽を見つめます。そうして、その光りを自分の身体の隅々まで吸い取り送ります。頭から足や手の先までその光りを送り、光り輝く自分を観かん想そうするのです。

わたしは太陽を拝んでいるわけではありません。この世の中で類たぐひ稀まれなる太陽の光りの前に自覚的に立っているのです。

朝早くにジョギングをしたり、犬を散歩に連れ出したりしている人を見かけますが、それらの人の大方の目は地上に向けられており、太陽の光りに自覚的に自分に向けることはないようです。まして、日中に於いては人々の目はひたすら地上のものにのみその関心に向けて生活をしています。

× ×
しかし、人は光りを忘れていくわけではありません。とくに私達日本人は日の出とか日の入りとかがとても好きです。山の稜りゅう線せんの向むかう側がわから光りをたたえつつ昇り来る太陽をご来光と呼び、遠く地平線に昇り海の上にさし照る朝日を光りのお渡りと呼んで、とても荘嚴しょうげんな気持ちになります。それは夜という闇を照らす光に対する畏敬いけいの念ねんでもあるのでしよう。

光りは常に闇との関係で見られます。「お先まっ暗」とは希望も夢も途絶えてしまった絶望の状態を語っているように、暗闇あんあんとは苦しみ、不幸、悲惨、不安、恐怖、死などを表しています。そして、そのような闇を照らす光りは、絶望に希望を死に命を注ぐことを意味します。また、汚けがれを清

める命の働きそのものとされるのです。さらに光が苦しみや悩み、失望、不安の闇を照らし、聖める命の働きのしるしともみられるのです。そのとき、光はそれ自身、神の世界、超越の世界からのメッセージを秘めているものとなります。

光が、神の世界、超越の世界からこの世へのメッセージを秘めており、それによって神の世界とこの世とを結びつける働きをなすものとすれば、神が光を創造なされたことの御意が、すこしは了解出来るようになります。

旧約聖書の創世記は、神が宇宙を創造なされたとき、最初の業について次のように記されてあります。

神は「光あれ」と言われた。すると、光があった。
神はその光を見て、良しとされた。

—創世記 一章三節—

「神は、その光を見て、良しとされた」のです。それは、光に於いて示される神の御意を良しとなされたのです。ですから、私達は光を見て、ただ光と知るだけでは光を見たことにはならないのです。光に於いて「光」を見、知り感じなければならぬのです。つまり、私達が日常に見る光の背後には日常性をはかるかに越えた世界が隠されてあるのです。

旧約聖書に「詩篇」という一冊がありますが、その中に、「神は、光を衣のようにまとい……」と一〇四篇にあります。又新約聖書には「神は近づきがたき光の中に住む」とテ

モテ第一の手紙六章一六節にあります。さらにすすんで、ヨハネ第一の手紙一章五節には「神は光であって暗いところがない」とあります。このほかにも聖書は、光を神のしるし、又は神からのメッセージを秘めたものとして語っています。そして、神を生きたキリストさまの到来を「すべての人を照らすまことの光があつて、世に來た」と、ヨハネ福音書は記しています。

わたしは光について語るとき、私自身のささやかな体験のいくつかを思い出します。

その一つは、今から八年程前の夏の夜のできごとです。私達の教会では毎年幼児から大人まで夏季集会を行います。それは幼児の部の一泊集会の時でした。夜、その日のプログラムはすべてを終え、子どもたちを教師が寝かしつけた後、わたしは午前一時頃から屋外に出ました。そして地面の上に正座して黙想に入りました。

そこは京都府と奈良県との境の京都側に位置する和束という山村で、村は南北に流れる小さな川に沿ってあり、周囲は三百米にも及ばない山に囲まれている茶処です。集会を行っている建物は小高い岡の上であり、私の座った場所からは周囲の山々がよく見わたせました。その夜は雲が無く夏の星座が満天にきらめいていました。

黙想に入ってからかなりの時間が経った後、眼前に並ぶ山々の峰が、一斉に光り輝き出したのです。それはどのように表現

すればよいのでしようか、とにかく燃え立つように輝き出したのです。その輝きは白光なのです。わたしは、何とも言えない安らぎと喜びの内にひたりながら、「輝いている、輝いている。山が生きて輝いている」と思いの深くで念いつつ、その光に当たっていますと、わたしの左斜め四、五米程前にある樹の梢全体も同じように光り輝きだしたのです。わたしは時をわすれてその光にひたっていました。やがて私は自身にかえったのですが、凸凹した地面に二時間近くも正座していたにもかかわらず、すこしも足に痛みを覚えなかったのはまことに不思議なことでありました。

×

×

このような光については、まだ他にも少しの体験があるのですが、それを御話いたしましたので、わたしの思いが却って通じなくなってしまうので、不必要に御話することをひかえたいと思っています。ただこのようなささやかな体験から言えますことは、万物は等しく神の光り輝く命をいただき、その命によって生かされ、保たれているということであり、また、さらに、光は神の命のメッセージであり、顕れでもありましたが、それは神の祝福と救いと暗示でもあるのだと言えます。

このように考えながら、聖書や仏典などを読んでみますと確かに光は宗教的な超越者の命や祝福、救済を暗示する出来事の一つであることが分かります。不思議な宗教的体験や出来事、またそのような存在とにおいては、必ずと言ってよい

ほどに光が伴っているようです。

私は、先に述べましたような光体験をする前は、例えば、キリストさま等の所謂聖画の頭のところに描かれてあります円光は、描かれてある人物の聖性を表現するための画家の想像と、願望による産物だとばかり思い込んでおりました。しかし、それは間違いだったので、想像でも願望でもなく、それらを描いた個人はどうであれ、そのことは事実なのであります。

×

×

それにしても、今日、私達は光をただの物理的な光としてしか見ないようになってしまいました。私達にとって光とは電気的光です。電気のエネルギ―は光だけでなく他のいろいろな動力や物質に転化しますし、その電気エネルギ―の一つが光なのです。そしてそのような光は、人間の生活を楽しませるためにのみある物理的な産物以外のなものでもないわけです。言わば、エアコンから出てくる温風や冷風と同じ類のものが、たまたま光りでしか過ぎないのです。そしてさらに、そのような発想にもとづく、さらに大きい熱エネルギ―の産物、しかも、まったく無償で勝手に降り注いでくるのが太陽の光りなのだと思います。ですから、今さら、太陽の光りに自覚的に向かおうとはしないのです。

ここで誤解しないで下さい。私は太陽を神さまのように思いません、と言っているではありません。そうではなく、光りというもの、特にこの世のすべてを照らす光りのなかの

光りである太陽の光りに、自覚的に自分を向わしめよ、と言っているのです。そのとき、私達は、神が光りを最初に創造なされた意味が分かってくるのです。つまり、人間の生活を便利にするために光りというものがあるのではなく、まさに闇を照らす光り、暗黒を聖める光り、すべてを許し包む光り希望としての光り、命としての光り、救いとしての光りこそ光りたる所以であることが分かってくるのです。

×
光りはいつも闇の中に輝くのです。それは闇を照らし明るくするためにだけでなく、むしろ、光りが光りであることのために闇の中に輝くのです。闇の中に埋没して見出すことが出来なくなってしまうものを明るみになかに照らし出す光りそのものの偉大さの証のために、光りは闇に輝くのです。

「われらは、あなたの光りによって、光りを見る」

—詩篇三六、一〇—

と聖書の記者は祈りました。

しかし、今日、私達は光りを見て、光りを見ず、ただの光りと見るゆえに、今日の人に救いも希望もないのです。ただ生まれ、働き、飲み食い、子どもを生み、育て、歳を老いて遂に、虚しく闇の中へ、わが身を運んでいくだけの人生となるのです。

×
イエスさまは、「わたしは世の光りである」と申されまし

た。「光りは闇の中に輝いている。そして、闇はこれに勝たなかった」と聖書は知らせてくれます。なんと有り難いことでしょうか。よくよく考えてみますと、この世は闇です。光りらしきことはあっても、やはりそれは真実の光りではありません。私達の魂は闇のなかで光りを求めて喘いでいます。そのような私達に「わたしは真実の光りです」と語りかけ、その光りを下さり、闇の中であって光りに生かしてください。キリストさまを知ることが、なんと有り難いことでしょうか。友よ、キリストの光りを共に受けよう。

みちしるべ

神のうるわしきを仰ぎ望んで喜びを得よう。 —聖書—

聖なる世界をいただく

私たちの肉体には五感とよばれる感覚器官があります。見るための目、聞くための耳、嗅ぐための鼻、食べ味わうための口、触れ感じるための皮膚。これらの器官の働きは、ただ感じるためだけのではなく、それをとおして自分の外の世界にあるものを、自分の内に取り入れる働きをしているのです。

このことは当たり前のことなのですが、よく考えてみると、自覚的にそれらを毎日働かせていないようです。

×

×

初めから今の肉体人間としての自分があったのではありません。口を通して物を食べることによって、今の自分の肉体が出来てきたのです。また、目を通して外のものを見ることによって、今の自分の知識や感性などが育てられてきたのであり、その他、耳で音を聞くことにより、鼻でさまざまな香りを嗅ぐことにより、さらに、皮膚をと

おして外界のいろいろなことを感じることににより今の自分の人格というものが造形されてきたのであります。

このように考えてみると、私達が毎日何を食べて何を見、何を嗅ぎ、何を聞き、何に触れるかということは、自分作りに決定的な影響を与えるのだということがわかります。

そこで、今回はこれらのことについて御一緒に考えてみることにいたします。

×

×

それにしても、わたしたちが見るといっても、見るのは私です。その私が見るとき、見えるのは私が見る分しか見ることが出来ないのだ、ということをよく知っておくことは大切です。ということとは、見るか見ないか、また見えるか見えないかということとは、その人の思いや能力によってさまざまなのです。

見たくないと思う人は見ませんし、見る力や知識の無い人には、見ても何も見えないでしょう。

このことは、聞くことにも、嗅ぐことにも、味わうことにも、触れることにおいても同じようにいえるのです。

ここで、皆さんに大切なことを示しておきましょう。それは、私達の五感を通して、私達に与え

ようとしている外界からのメッセージの内容は、実に偉大な
それであるにも関わらず、私達は自分の五感をとおして、受
け取っているものは、その僅かなものにしかすぎないとい
うことです。

ですから、キリストさまは「あなたがたは見ても見ず。聞
いても聞かず。救われることがない」と申されました。

御話をもとにもどしましょう。とにかく何を食べるかとい
うことだけでなく、何を見、聞き、嗅ぎ触れ感じるかとい
うことが、自分作りにとっても大切だとすれば、今、私達はど
のような生活をしてきただろうか、と自分を振り返ってみたい
とおもいます。

「わたしは、今までどのようなものを見て来ただろうか」
「わたしは、今までどのような言葉や音を聞いて来ただ
ろうか」……。

こうして、過ぎ去った自分の在りようを振り返ったなら、
では、今から私はどうすればよいのかということに思いを向
けましょう。

見ることに限って申し上げますと、先ず、自分の家で、自
分が最も落ち着ける場所に「聖なる画」を置いてみることで
す。何故聖なる画でなければならぬのかといえますと、日
常性につながるものは、何処にでもあり、いつも見ているの
です。それを、わざわざ自分の部屋に持ち込む必要もありま

せん。自分が最も落ち着ける空間に、日常性を越えた聖なる
世界を現すもの、(その一つが聖なる画—宗教画)を置くの
です。それを拝むために置くのではなく、目をとおし
てそれが現す聖なる世界を自分の内に、頂^たくために置くのです。

私達は、話すことにも、読むことにも、見ることに疲れ
何もする気にもならない時があります。しかし、そのような
時でも、何思うでもなく眺めるといふことはしているのです。
また、見ていないようでも見ている、というのが私達の日常
です。じつは、このような状態の時こそ、自分の内に最も多
くの影響を与えるものが入りこんでいるのです。その典型が
赤ちゃんや幼児の眺める、聞くということなのです。乳幼児
の魂の基礎は其処で作られるのです。

今日、私達を取り巻く環境からの視覚への刺激はますます
俗悪で、肉体的な欲望をそそるものばかりとなりつつありま
す。人々はそれを自分の内に取り込み、いよいよ救いようの
ない肉欲の欲望充足型の地獄人間になりさがって行きつつあり
ます。しかし、誰もそれで満足しているわけではありません。
私達は、何を食べるかに責任があるように、何を見るかにも
責任を持たねばなりません。今、自分の手元に、日常性を越
えた聖なる世界を置き、それが現す世界をやさしく迎えいれ
てみてはどうでしょうか。



みちしるべ

恐れることはない —キリストの言葉—

わたしの頂いた信仰

最近、宗教に関するさまざまな印刷物が、わが家の郵便受にも入っています。

昨日も、ノストラダムスの〇〇、アラーの〇〇とか、などという新宗教の広告のような冊子や又霊界がどうの、こうの、霊のパワーを受けて病がどうの、というような宗教の広告が入っていました。今号は、このような宗教について少しご一緒に考えてみましょう。

いろいろな宗教の案内や広告、さらに、その信者さんたちの、時として不躡な訪問を受ける時、「宗教とはなんなのだろうか」と、改めて考えてしまいます。

また、事細かに死んでからの世界、つまり霊界の仕組みなどを聞かされたり、死んだ人間の霊の言葉がどうのこうのと述べられたり、また、何年後に〇〇が起るとか起らないとかいうことが語られ、それが当たるとか当たらないとか騒ぐ人達を眺めていると、宗教とはなんなのだろうか

おもいます。

新宗教、または新々宗教と呼ばれるこのような宗教に、一部の若者が大勢集まっているようです。そしてその目的は、不思議な霊の力を受けるためののだそうです。

その場合、たいいてい霊能力をもった教祖がいて、その能力に魅せられて、熱狂的な集団がつくられ、ときとして、さまざまな社会問題を生み出しています。親子の断絶と対立、家庭の崩壊、騙したとか騙されたとかいう憎しみや争いは裁判されたにまで発展してしまいますし、方や大きくなった集団は、莫大なお金を背景に政治にまで手をだすということになるようです。勿論、宗教集団どうしの争いもおこりますし、内部での欲がらみの権力争いもおこります。とにかく、そのような宗教や信仰の集団の姿や在り方を眺めていますと、宗教とは、信仰とはなんなのだろうか、改めて考えてしまいます。

わたしもわたしの宗教を持ち、その信仰に生かされている者ですが、わたしが聖書をとおしていただいています宗教や信仰の理解は、先に見てきました宗教や信仰の姿、また在り方とは、いささ

か異なります。

宗教や信仰にはそれぞれに理屈がありますが、理屈が宗教や信仰を成り立たせているわけではありません。むしろ宗教や信仰が外に向かって理屈をつくり出したのであって、信仰に生きている者には理屈は無いし必要でもありません。

なぜならば、人間が生きていることには理屈などないからです。いわば、私達はみんな生かされているだけであり、生かされているからこそ生きています。

私達はだれひとりとして、自分の命を自分で造ったものはいません。わたしの命は与えられたものなのです。また、私達は自分で命を保っているではありません。それが証拠に命が尽きるときが来たならば、どのような手立てをしてもどうすることも出来ず、死んでいかなくはなりません。また死んでしまった後、どのようなようになるのか誰も知ることは出来ません。色々なことが体験され、想像されて語られますが、そのすべてはなにも分かりません。ただ、命を与え、それを保ち生かし、この世から取り去るお方に、すべてを委ねるしか、私達にはいかなる術もないのです。

×

×

私が聖書からいただいている信仰は、わたしはわたし以上のお方に命を与えられ、保たれ、そしてやがてこの世から取り去られていく者がわたしであり、その後の一切もすべて、そのお方にお任せしておくことによってのみ、安心し、感謝する、ただそれだけなのです。このことを、キリストさまが

自らそれを生きることにより、具体的に示してくださったので、そのことを信じて生きています。

ですから、キリストさまは申されました。

何を食べようか、何を飲もうかと自分の命のことでも
思いわずらい、何を着ようかと自分の体のことでも思
いわずらうな。……だれが思いわずらったからとて、
自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか……
ああ信仰のうすい者よ、……これらのものが、事々
くあなたがたに必要なことを、天の父は御存知
である。

— マタイ福音書六章二五以下

わたしが聖書を通しキリストさまに於いて示され与えられた信仰は、どんなことが起こっても起こらなくても、そのことには一切関わりなく、わたしを生かし保って完成してくださる神におまかせして、生きること、そこで安心し、感謝していることであります。世の終わりがどうか、霊界がどうか、騒ぎたてて、あげくのはては的中したしななど、当ても遊びでもありますまい。そんなことに思いわずらい一喜一憂しては、ますます迷うだけです。

どんなことが何時起こっても、起こらなくても泰然自若、悠悠緩緩、安心していられる信仰がわたしの頂いている信仰なのであります。うるちよろと騒ぎたてる必要などありません。

みちるベイト

いつも祈っていないさい — 聖書 —

一番美しい姿

今号は、「礼拝」ということについて、ご一緒に考えてみましょう。

「礼拝」を「らいはい」と読んだり「れいはい」と読んだりしますが、わたしはこの言葉の響きがとても好きです。それは、表面の感覚だけを通りすぎるそれではなく、内面の奥深くまで届く響きを秘めているからです。

また、「礼拝」という漢字も、とても気に入っています。何故なのだろうか、字典にたずねてみますと、「礼」も「拜」もともに、人が「神にヌカヅキツカエ、ライハイしている形」だとあり、私の心がひかれる理由が、なんとなく理解できたように思いました。

そう言えば、新約聖書に出てくる「礼拝」という言葉も、漢字のもつ意味とあまり違わないようです。

とにかく、ここでは、特定の宗教の礼拝についてではなく、私達にとって礼拝ということがもつ意味を、少しだけですが、ご一緒に考えてみましょう。

よう。

人の貌かたちで最も美しいものは祈りの姿だとおもいます。何故美しいのでしょうか。それは「私心」が越えられている貌かたちだからです。

「私心」とは、自分の肉体的な感覚の欲望だけを満たすことを求めている心のことです。ですから、最も醜悪しゅうあくな人間の貌かたちは、他ほかでもなく「私心」にのみ生きている姿です。

自分の肉体的感覚の欲を満たす為には、どんなことでもする人間。ただ自分だけ、この世だけ、それ以外に生きることを知らない人がいたとすれば、これ以上の醜悪しゅうあくな人の貌かたちはありません。人はこのような姿を「鬼のような人」「悪魔のような人」と言います。

しかし、よくよく自分自身を省かえりみますと、その「鬼のような人」の貌かたちを、自分の奥深くに隠かくしていることに気づきます。たしかに、どの人の内にも鬼が住んでいます。「私心」とは、この鬼の心です。悪魔の心のことです。ですから、どのような人も自分の内に醜悪しゅうあくさを隠かくし持っているのです。

しかし、祈る人の貌かたちには、醜悪しゅうあくな鬼、つまり、「私心」が越えられているのです。だから、その姿は最も美しいのです。

祈るとは、自分の身体も智恵も感情も意志も、即ち自分のすべてを神の真実に向けた貌かたちです。つまり、その時「私心」は越えられ、醜悪な鬼や悪魔は消えているのです。

先に、礼拝という文字が持つ意味が、神にヌカヅキ、ツカエる貌のことだとありましたが、正に、礼拝に於ける人の貌は、祈りの姿そのものなのです。

世界にはさまざまな真面目な宗教があり、その教義や儀式は違っても、礼拝はどの宗教においても本質的な要素となっています。つまり、礼拝のない宗教はなく、形や方法は異なっても祈りの無い宗教はありません。正に、礼拝と祈りこそ宗教の中心であり、それによって、人は「私心」を越えるのです。

私心を越えるとはどういうことなのでしょう。実は、私達の内の最も深い処には、「私心」を越えている念が備えられているのです。「本当の自分」と言ってもよいでしょう。魂より深い霊と言ってもよいでしょう。それは、一般に言う良心よりも、もっと根本的なもので、私達の良心を動かしているものだと言えば、少しは理解できましよう。とにかく、その本当の自分というものが持っている、ただひとつの願いこそ、ほかならぬ神に向うことであり、神の真実に繋がることなのです。しかし、人は「私心」で、それを押さえつけ、その願いを拒否し、その叫びに耳を向けずに生きているのが私達の生活であります。

本当の自分が神に向かつて解放されなければ、私達の根本的な不安は消えません。「鬼」が自分の内で主人のように支配している間は、肉体的、感覚的な欲望は満たされても、決して、本当の自分は満たされることなく、不安と焦り、不満と愚痴、争いと憎しみとは無くなることはないでしょう。そしてますます、人間は醜悪な姿になっていくことでしょう。

祈ることは、本当の自分の願いに従う貌なのです。礼拝といふことは、人間にとつて自然な貌なのであります。自然な姿だからこそ、最も美しいのです。最も平安を覚えるのです。

そのような霊としての本当の私は、養い育てなければ、決して成長しません。それは、身体が毎日食物をとることによって強健に成長していくのと同じです。

毎日、毎日、時を定めて神に向かうことこそ、本当の自分、つまり、霊を養い成長させる、当然の務めなのです。礼拝とは、本当の自分、霊がはべる食卓のあります。

今、私は、本当の自分が求める求めに、又、願う願いに、心しずかにして耳を傾け、礼拝という食卓に、みなさま方と一緒に、はべりたいと願っています。

あとがき

この冊子は「みちしるべライト」の一部をまとめたものです。ここで語られていることは、だれでもが日常経験していることであり、私たちは何も考えることなく見過ごしてしまっています。しかし、それらの事柄は、とても大切なことを秘めていることを、この冊子は私たちに教えてくれます。さらに、この冊子は、物事を自分の手に取って、見つめることの大切さを教えて下さっています。お読みになる方は、必ずこころ豊かになられることと思えます。是非とも、多くの方々が読みくださることを願っています。

一九九三年十月二十二日

山本 哲也

第四刷 あとがき

一版が出て七年が経過しましたが、その間、多くの皆様に愛読されている冊子を再び増刷できて、有り難く感謝しています。

拙い手作りの冊子ですが、今後もみなさまの生活に豊かさを加える一助となれば幸いです。神さまの祝福がみなさまに豊かにございますようにお祈り致します。尚、冊子作りに御協力くださった教会の教友の姉妹の方々に深く感謝致します。

二〇〇〇年一〇月二〇日

松 下 昌 義

みちしるべ文庫 六

『人柄のかおり』

一九九三年一〇月二二日 (第一刷発行)

二〇〇〇年一〇月二〇日 (第四刷発行)

著者 松 下 昌 義

発行所 左京キリスト教会

京都市左京区下鴨南茶の木町二九

電話 (〇七五) 七八一一九六四〇